

# 新潟青陵幼稚園における園内研修 - エピソード記述を用いた園内研修の事例報告 -

仲 真人

In-School Teacher's Training at Niigata Seiryō Kindergarten  
- A Case Report of In-School Teacher's Training Using Episodic Recording Method -

Masato Naka

## 1. はじめに

新潟青陵幼稚園は学校法人新潟青陵学園が経営する私立幼稚園である。園児の定員は年長（青ばら）が52名、年中（白ばら）が52名、年少（赤ばら）が46名、満3歳児（もも）が10名であり、満3歳児が1クラスであるほか、各学年2クラスで編成されている。全体で7つあるクラスに1名ずつ担任がおかれ、これを4名の教育補助が支援している。幼稚園が創立されたのは昭和42年4月で、新潟青陵女子短期大学幼児教育科の幼稚園教諭および保育所保育養成のための実習園（付属幼稚園）として設置された。その後、平成4年の短大改組で「新潟青陵女子短期大学附属幼稚園」に改称、さらに平成16年の改組で短期大学の付属を離れ、「新潟青陵幼稚園」に改称されて現在に至っている。教育方法は一人ひとりの子どもの主体的な活動を尊重する自由保育を基調としつつ、シュタイナー教育を取り入れ、子どもの想像力・創造性・感性を育むことを重んじている。1日の活動の基本的な内容は、登園後の自由遊び（室内）、ライゲン（クラス全員で行う表現遊び）、園庭・遊戯室での自由遊び、給食、自由遊び、お帰りの会・素話、というものである。保育者が主導して行う一斉活動は、朝の会を兼ねたライゲンとお帰りの会・素話があるだけで、室内および園庭・遊戯室での自由遊びに多くの時間を割いている<sup>1)</sup>。子どもの主体的な活動を尊重する自由保育においては、一人ひとりの子どもに対する保育者のきめ細やかな幼児理解と臨機応変な援助が要求される。そのために新潟青陵幼稚園（以下、青陵幼稚園）では、保育のエピソード記述を用いた園内研修を週1回実施して、保育者の幼児理解と援助技術の向上に取り組んでいる。

保育のエピソードとは、保育の当事者として子どもにかかわる保育者の心が揺さぶられた体験のことであり、保育のエピソード記述とは、「保育者が読み手に自分の心揺さぶられた体験を分かってもらえるように、読み手に伝えるつもりで丁寧に描き直したもの」のことを指している（鯨岡・鯨岡2007；鯨岡2015）。保育のエピソード記述を用いた研修を推奨してきた鯨岡によれば、目では見えない子どもの心の動きを捉えることができるのが、子どもに寄り添う保育者自身によって書かれたエピソード記述であり、それを保育者どうしで読み合わせることによって、幼児理解や保育に対する省察が深まり、保育の質の向上がもたらされるという（鯨岡2013；鯨岡 前出）。鯨岡に刺激を受けるかたちで、近年、保育

研究においてもエピソード記述を用いた研修の実践報告（今村2010；今村ほか2011；岡花2010；岡花ほか2010；福崎ほか2012, 2013, 2014）やエピソード記述を用いた研修モデルの提案（岡花ほか 2009；今村ほか2013）が相次ぐようになってきた。ただし、これまでに報告されている研修事例は、研究者が保育現場に介入して実施されたものであり、保育のエピソード記述を用いた研修を現場の保育者が主体的に実践してきた事例はほとんど報告されていない<sup>2)</sup>。

青陵幼稚園の園内研修が注目されるのは、保育のエピソード記述を用いた研修が現場の保育者によって工夫され、15年以上にわたって実践されてきたことである。加藤由美子園長によれば、同園でエピソード記述を用いた園内研修を始めたのは平成10年のことで、最初は同年の11月に開催された幼稚園の公開研修会の準備として取り組んだものだという。ところが、始めてみると、「とてもおもしろく、子どもの変化が手に取るように分かり、子どもの発達が理解できる」ようになり、「継続することで保育の質が上がって」きたという。これまでの研修をふり返り、加藤園長は「これなかったら、これまで私たち、やってこれなかっただろうと思います」と語る。私は2016年の4月から、幼稚園業務の実際を知るための参与観察を青陵幼稚園で継続しているが、その過程でこれまで数回、園内研修に参加する機会をもった。その際には了承を得て研修のやりとりの録音と写真撮影もおこなった。今回は私が収録した音声データの一部を用いて、青陵幼稚園の園内研修の実際の様子を報告したい。また、園内研修後におこなった保育者へのインタビューもふまえて、青陵幼稚園における園内研修の意義と課題についても考えてみたい。

## 2. 園内研修の内容

園内研修が行われるのは通常、幼稚園の教育時間終了後の午後3時半から1時間半ほどの時間である。初めに報告者が事例のエピソードと考察を記載したプリントを配布し、口頭で報告を行う。鯨岡らはエピソード記述の書き方や形式も指示しているが（鯨岡・鯨岡2007；鯨岡2015）、青陵幼稚園では、これまでの研修を通じて「事例（エピソード）プラス考察」の基本形式が自然と定着したそうである。研修のテーマはあらかじめ設定されておらず、各クラス担任が普段の保育で抱えている悩みや気になる子どもの姿、うれしかった出来事などを思い思いに選んで報告している。また、エピソード記述にこだわらず、簡単なメモ書きのようなものを資料として採用することもあるという。報告の後、全員で質問や意見を述べ合い、事例を検討する。事例の検討中に出てきた疑問や関心に導かれて、事例以外の出来事や子どもの姿が話題に上ることもある。研修中の雰囲気は和気あいあいとしたもので、たがいに子どもたちの姿を語り合ううち、思わず笑いが起こることもしばしばである。

今回紹介するのは2017年2月7日におこなわれた研修のやりとりである。当日は3事例の報告と検討が行われたが、紙幅の都合で最初の事例の部分のみを紹介する。報告者は青陵幼稚園に勤務して6年目、年少クラス（赤ばら）担任のA教諭である。文字起こしした研修のやりとりは、読みやすさを考慮して若干の修正を施している。登場する保育者はアルファベットの匿名表記（青陵幼稚園の保育者は、ふだんお互いのファースト・ネームに「さん」をつけて呼び合っている）、園児の名前は仮名である。また、文中のカッコ〔 〕は発話内容の補足、ドット〔 (・) 〕は沈黙（「・」1つで約1秒の沈黙）、二重カッコ



園内研修のようす

[[ ( ) ]]は状況説明、二重斜線[ / / ]で挟まれた部分は重複発話をそれぞれ表している。

### 1) 事例「すべり台」の報告

A教諭が事例「すべり台」のエピソードと事例の考察を口頭で読み上げる。エピソードの大意は、すべり台を独り占めしていた3歳児の弥生（仮名）に怒った5歳児の佳乃（仮名）たちが、弥生の持っていたホウキを取り上げてしまい、弥生は大泣きしてしまう。気づいたA教諭がなだめても泣き止まない弥生だったが、一緒に遊んでいた夏帆（仮名）たちが話しかけるうちに気持ちが静まり笑顔が見られた。すると弥生からホウキを取り上げた5歳児たちがやってきて、一緒に遊ぶことを提案する。A教諭がそれを弥生たちに伝えるとみんな頷き、保育者も参加して異年齢での遊びが始まったというもの。

(園内研修資料：A教諭による事例と考察)

#### 「すべり台」

園庭で弥生が大泣き。理由を聞くと使ってたホウキがなくなったか、取られた等主張する。青ばらさんに取られたとか…。一緒に探しに行くと、佳乃（青ばら）が弥生のホウキを持っている。佳乃に「弥生ちゃんが使ってたんだって」と言うと、「だってすべり台独り占めしてるんだもん」と言う。佳乃に「それは嫌だったね。でもそれでホウキを取るのも赤ばらさんも嫌な気持ちになっちゃうかもね。私がお子に皆も使いたいことちゃんとお話してくるからそれは返してあげて」というと、ホウキを投げて返してきてどこかへ行く。弥生は夏帆や優希たちと魔女?のような遊びをしていて、すべり台を自分たちのものと弥生が決め、入ってくる人たちを拒んでいて、それで取られたようだ。返してもらったホウキを持って行き「そっかあ、ホウキが取られちゃって悲しくなったんだね」というと、頷く。「でもお姉さんたちもすべり台使いたかったんだね」と話すが泣きながらひたすら「ダメ」と言う。「弥生ちゃんのだった。ダメなの」の繰り返し。「困ったなあ。どうしようか…」と言うと、隣にいた夏帆が「すべり台が2つあればいいのにね。5個6個あればみんな使えるね」と笑いながら話す。保育者「そうだね。6つもあったらみんなのクラスで使えるね」。夏帆、優希「じゃあ、10個は? (笑) 17個もあればいいのにね～あはは～」などと話していると弥生も「17個? あはは～」と笑い、数字を多く言って楽しんだ後、気が済んだのかどこかへ走っていった。しばらくすると、佳乃、千尋、梨花、詩歩が保育者の元に来て、「増え鬼でいいなら入れてあげるよ」と保育者と赤ばらの元へくる。保育者が「青ばらさんが増え鬼に誘ってくれてるよ」と伝えるとみんな頷き、青ばら、赤ばら、保育者で鬼ごっこが始まる。

#### 《考察》

- ・ 弥生は場所や物の所有欲が強く、保育者が相手の思いを伝えても自分中心でまだまだ相手も使いたい気持ちに気付いていけない。今回も頑なに譲らない。だが、園庭には1つしかすべり台はない。さすがにそれを弥生だけで所有することはな…と思い、年長児の思いを伝え、それでも譲らない弥生に困ってしまったので、弥生を含め、子どもたちに解決方法を託した。すると夏帆が解決策を提案してくれたことで、場の空気が和み、弥生の気持ちも違う方向へ向くことができた。今はまだまだ自分優先だが、少しずつ月齢の高い女児が弥生の姿を理解してくれる経験を通して、相手の思いやかかわりを学んでいけるのではないか。

・佳乃の行動に対して、赤ばらさんがすべり台を所有してしまったからという理由でその子の物を取るのもどうなのか・・・という思いがあったので、佳乃に対してはそのように言葉を掛けた。ぶっきらぼうな返し方だったがその後、赤ばらさんがすべり台ではなく他の場所で楽しく遊んでいた姿を見て、先ほどの行為を悪かったと感じそのように言葉を掛けてくれたのではないかと思った。青ばらさんに取られて嫌だったと弥生が思うことで終わってしまわずに、青ばらさんと鬼ごっこを通して打ち解けられたので、お互いにとっても後味の良い形で解決できたことは良かったと思う。この青ばらの姿も弥生や夏帆等にとっても物事を解決するお手本になるのではないか。

## 2) 「佳乃ちゃんのようなストレートな行動にでる子ども大事な存在ですよ」

((報告後、各自1分間ほど事例を読み直す))

A教諭：弥生ちゃんもすべり台を譲らなかったんだよね。佳乃ちゃんたちの気持ちは分かるんですけど。

(・・・)

B教諭：青ばらは佳乃ちゃん以外に千尋ちゃんも？

A教諭：そう、だから懐かしいメンバーだなと思って(微笑む)。なんか(そのときの状況)分かるんですよ。あとで鬼ごっこを提案してくれたのは千尋ちゃん、千尋ちゃんが「増え鬼なら入れてあげるよ」って言ってきて、その後ろに(青ばらクラスの)梨花ちゃん、詩歩ちゃんもいて「そうだよ、そうだよ」って。(・・・)ホウキを投げて返した時は千尋ちゃんも後ろにいたんです。だから、みんなで一緒に遊んでいたのが分かったんですね。((一同うなずく))  
(・・・)

園長：佳乃ちゃんのようなストレートな行動にでる子ども大事な存在ですよ。(・・・)夏帆ちゃんたちは年長さんから「すべり台使うからどいて」と言われた時に、「そうだよな(すべり台を独り占めしちゃいけない)」と思うところはあったと思うんですよ。

A教諭：たぶんそうですね。

園長：ね。だから、そういう解決策(年長さんにすべり台をゆずる)は出してくれたんだと思うけど。すべり台にこだわっていた弥生ちゃんの学ぶ場となったのは、佳乃ちゃんのすぐストレートな行動で、それが考えることにつながっていったらと思うんです。

事例のエピソードに登場する弥生はA教諭が担任する年少クラス(赤ばら)の園児である。自己中心性がつよく、自分の主張が受け入れられないと、大きな声で泣いて意思を通そうとする姿が見られるという。一方、弥生のホウキを取り上げた佳乃たちは現在、年長クラス(青ばら)であるが、年中までは同じくA教諭が担任する園児だった。以前の佳乃たちは自己中心性がつよく、感情がすぐ行動に出る子どもたちで、けんかを日常的に繰り返し、他の子どもとの遊びを楽しむことができない子どもたちだった。A教諭も加藤園長も佳乃たちの指導には特に手を尽くし、年長クラスに進級してから、ようやく落ち着きがみられるようになってきたという。

ここで注目されるのは、「佳乃ちゃんのようなストレートな行動にでる子ども大事な存在ですよ」と、弥生からホウキを取り上げた佳乃たちを評価する加藤園長の発言である。一般的には佳乃たちの行為は

好ましくないことであり、保育者が注意を与えて、謝らせるべき場面だろう。ところが青陵幼稚園では、こうした子どもたちの主張のぶつかり合いやトラブルを、子どもの大切な学び合いの機会と捉えるのである。下線部分の発話について補足説明を求めると、加藤園長は次のように答えてくれた。

子どもどうして体験しなければ。よく（他園で）先生たちが使うのは「みんなのすべり台だよ。みんなのおもちゃだよ」って言葉ですけど、これって子どもには伝わらないんですよ。「みんなのって何？」って。だからそういう言葉で子どもを納得させたり、あるいはこちらが「(他の子にも)貸すのよ。別の場所でしなさい」と裁いたりしたら、子どもたちの学びはないんですよ。だから子どもどうしてぶつかることがとても大事で、あの人もここを使いたかったって、(子どもは)じきに分かるんですよ。

また、研修後に行ったインタビューでも、加藤園長は次のように述べている。

自分たち保育者は子どもの世界を支える存在でありたい。黒子のような存在で。子どもの世界を尊重してあげると、子ども自身が持っている育つ力が見えてくるんです。保育者が活躍すると、それが損なわれてしまうんですよ。

保育者が子どもを指導するのではなく、子どもどうしの学び合いを援助することが青陵幼稚園の保育の基本である。それを実現するために、保育者が「出過ぎないこと」を大切にしている。「状況は見ていし、どうなるんだろう、どこで手を出そう、口を出そうとか、いつも考えているんだけど、だけど余計な手出し、口出しはしない」それが青陵幼稚園の保育者の姿であると加藤園長はいう。

### 3) 「あの子たちの気持ちを伝える言葉に替えた方がいいんじゃないのかな」

園長：私ね、Aさんの言葉の中で気になるのが、これみんな、私たち全員がやることだと思うけど、「赤ばらさんも嫌な気持ちになっちゃうかもね」っていう。(・)「かもね」じゃないんですよ。なったんです(強調する)。それを柔らかく言おうとして、「かもね」ってつけたと思うんだけど、それはないですよ。//A先生：うん。//なったんだよ(強調する)。だからこういう時には「(赤ばらの子が)泣いてたよ」って、その子の状況を伝えるというか、その子たちの気持ちを伝える言葉に替える方がいいと思いますね。(・・・)「赤ばらさん、嫌だったから泣いてたよ」とか。(・・・)これが「赤ばらさんは嫌な気持ちになったんだよ」って言うと、大人が大人の言葉として伝えていることになってしまいますから、あの子たちがこういう状況だよという伝えかたのほうが、やわらかく伝わると思いますよ。

((15秒ほど発話なし))

A教諭：うん。

((10秒ほど発話なし))

続いての場面では、エピソード中のA教諭が発した「赤ばらさんも嫌な気持ちになっちゃうかもね」という言葉かけに対して、加藤園長の意見が述べられる。「かもね」は「私の口癖」というA教諭は、このとき「はって、気づかされた」という。

自分がふだん癖になってることって気づかないんですよね。だから、ああいうこと言っていただけ  
ことは、私にとってすごい良い気づきだったです。(その後は)それ(「かもね」)を使わないで、はっ  
きりと状況を説明しようっていう意識が芽生えてきたので、ほんとに(自分の)わるいところは言っ  
てほしい。自分のためになるから。ほんとにすごくありがたいなって思います。

自分は「まだまだ視野が狭い」というA教諭は、「こういう言葉かけがあるし、こういう視点で(子  
どもを)見るんだってというのが多いので、なるほどって気づかされることが多い」と、園内研修が自身  
の保育技術の向上に役立っていることを語る。

#### 4)「思いやりが育っていますね」

園長：ここの佳乃ちゃんたち、千尋ちゃんを中心だろうと思うんですけども、思いやりが育って  
いますね。

A教諭：そうですね。それはびっくりしました。成長したなって。

園長：ほんとに。あの子たちがこういうこと言ってくれるんだって。すごい成長して。(・・・)  
今までだったら、言いつけに来てたはずです、ここに(職員室に)。((笑))

A教諭：そうですね。

B教諭：でも、(青ばらの子たちが)ホウキのことには触れてないところが、おもしろいですね。増え鬼っ  
ていう((一同、頷く))、別の方向性で近づいてきた感じが。「ごめんね」とか、そういうこ  
とではなく、「増え鬼でいいなら入れてあげるよ」って。彼女たちなりの関係の立て直しな  
んだけど、ちょっと視点を変えてきたところが、おもしろい。

A教諭：そうですね。

園長：ここで「さっきはホウキとってごめんね」という言葉にはなってなくても、あやまるってこ  
とは、言葉だけじゃなくって、心ですよ。

B教諭：「入れてあげるよ」じゃなくってね。

A教諭：うん。

((10秒ほど発話なし))

A教諭は「自分の中で気になる子が、意外な優しさだとか、こういう姿もあるんだっていうのを見る  
と事例にしたくなる」という。今回の事例を選んだ理由を彼女は次のように語る。

もちろん弥生ちゃんとか、弥生ちゃんの気持ちを上手く盛り上げてくれた夏帆ちゃんの姿も気にな  
ったんですけど、何よりもすごく大変だった2年間のこの子たち(佳乃たち)が、こんなふう  
に赤ばらさんの気持ちを感じとれるようになった、そういうふう  
に成長したんだっていう、その姿がす  
ごくうれしくて、

子どもたちの成長を実感することは、保育者にとって大きな喜びである。事例に込めたA教諭の思い  
を受けとめるように、加藤園長も「思いやりが育っていますね」「あの子たちがこういうこと言ってく  
れるんだって。すごい成長して」と応答する。青陵幼稚園の園内研修でしばしば見られるやりとりであ  
るが、園内研修は保育に携わる喜びを同僚と分かち合う場にもなっている。

続くB教諭の発話は、エピソードで佳乃たちが発した「増え鬼でいいなら入れてあげるよ」という申し出に向けられたものである。誰かと友だちになる、友だちと仲直りをするといった子どもの関係形成についても、青陵幼稚園ではなるべく介入を控え、子どもたちが主体的に取り組むことを大切にしている。B教諭は「増え鬼でいいなら」の申し出を「彼女たちなりの関係の立て直し」と評価し、加藤園長も「さっきはごめんね」という言葉になっていなくても、年少児に詫びる心の表れと認めている。この部分は佳乃たちの心の育ちを読みとる保育者の幼児理解の場面といえる。

#### 5) 「心あたたまる事例です。これが異年齢でできたっていうことは」

園長：鬼ごっこって、どんな感じですか？

A教諭：初めに私が鬼になったんです。増え鬼でした。

園長：増え鬼？鬼が増えていく鬼ごっこ？

A教諭：そう、増えていく。(青ばらの子たちが)「増え鬼なら入れてあげるよ」って言って。で、私が鬼になって、私が佳乃ちゃんとかタッチして、佳乃ちゃんが赤ばらさんを追いかけたり、千尋ちゃんを追いかけたりとか。赤ばらさんはタッチしても(まだルールが)分かんないから逃げていくんですけど、でも青ばらさんは分かるからタッチされたら追いかけてくれて。でも、知らないうちに赤ばらがどんどん(遊びから)抜けていくから、それで自然と終わっちゃったんです。ほんと短い、5分もったかもないくらいだったんですけど、(赤ばらクラスの子たちが)自然と抜けてって、それに対して(青ばらクラスの子たちは)文句も言わないで。

園長：じゃあ、青ばらさんは、ルールが分からない赤ばらさんが、(鬼にならずに)また逃げるのに怒ることはなかった？

A教諭：なかったんです。逃げていってもべつに何にも言わないし。それでたぶん、青ばらさんたちも「(赤ばらクラスの子たちが)意味分かってないんだろうなって」思ったのか、赤ばらの子たちにタッチしなくなったんですよ。それは分かてるんだなと思って。いくらタッチしても無理なんだってことが。(泣いていた)弥生ちゃんも楽しそうだったんですけど、いつの間にかどっかへ行って、それで自然に(遊びが)なくなっていったって流れでした。

園長：いいですね。心あたたまる事例です。これが異年齢でできたっていうことは。

続いて加藤園長の質問に応じたA教諭が、事例のエピソードには描かれなかった「増え鬼」の成り行きについて語る。「仲直りのしるし」として始まった「増え鬼」であるが、年少の弥生たちがルールを理解できなかったため、遊びは短時間で自然消滅してしまう。ところが佳乃たちは腹を立てることなく、遊びの消滅を受け入れていった。その姿から佳乃たちの心の育ちが確認され、加藤園長は「心あたたまる事例です」と評価している。この部分も佳乃たちの心の育ちを読みとる保育者の幼児理解の場面といえる。

#### 6) 「仲間として、ちょっと認めてきたんだよね」

園長：これ白ばらさん(年中クラス)だったらどうだろうね？相手が青ばらさんじゃなくて白ばらさんだったら。こう上手くはいかないでしょうね？

C教諭：男の子か女の子かによっても違いますね。男の子だったら、よくDさんのクラス（年少）の、  
 //D先生：あー、//男の子に（白ばらの子が）つよく言うみたいで、Dさんに呼ばれて  
 行くのは大きい池。ブランコのとりの大きい池で赤ばらさんが遊んでいると、（白ばらク  
 ラスの男の子が）「ここ俺たちが掘ったんだ！俺たちの池だ」//A先生・D先生：うんう  
 んうん。//てなことを言うんですね。でも、祐太君がいつとき変わった姿がありましたよ。

E教諭：そうそうそう。うん。

D教諭：ありました。いつも（池に）来て、「そこ俺たちが前の前に使ってた」とか「前の前の前に使っ  
 てたんだぞ」//（一同、笑）//ってというのがどんどん始まって。「前の前の前じゃな  
 くて、今日は赤ばらが使ってるんです」って私が言うんですけど伝わらなくて。Cさんから  
 何回も言ってもらっていて。それが12月の末くらいに、手前のほうの川みたいな溝のところ  
 を掘ってたら、「俺、前そこでやってたんだ」って、祐太君が来たんですね。あ、また今日  
 も始まるんだ。きっと「俺たちがここ使ってた」って言われるんだと思って、//（一同、  
 笑）//ドキドキしながら「今は赤ばらさんと掘ってるんだよ」と言ったら、「ありがと  
 な！」//（一同、爆笑）//って言われて（笑う）、//（しばらく笑いが続く）//  
 //そういうこともあるんだよ！（笑う）。自分たちのっていうのは抜けてないんだけど、な  
 んか、ちょっと、違ったあれでしたよね（笑う）。

C教諭：また違う姿が出てくるのかなと思います。

園長：ちょっと受け入れたんだよね。（池に）入られるのは嫌だって思いから、仲間として、ちょっ  
 と認めてきたんだよ。

D教諭：でもまだ「俺のもの」なんでしょうね。

C教諭：そうだと思います。たぶん。

園長：（先生は）まだまだ手伝ってくれる人。

C教諭：そうなんです。自分中心。

加藤園長が年中児（白ばら）と年少児（赤ばら）のかかわりに話題を転じたことにより、年中担任の  
 C教諭と年少担任のD教諭から新たなエピソードが紹介される。それは年少児が園庭の「池」で遊んで  
 いると、いつもやってきて「そこ俺たちが前の前に使ってた」と主張する年中の祐太が、年少児たちの  
 遊びを受け容れる態度を示すことがあるというものである。このエピソードについてのやりとりから、  
 祐太の人間関係や社会性の育ちが確認されている。この場面のように、報告者の用意した事例に限らず、  
 研修のやりとりの中で何人もの子どものエピソードが紹介され、話題となることは多い。子どもたちの  
 微笑ましいエピソードが紹介されることで笑いが起こり、研修が和気あいあいとした空気に包まれるこ  
 とはしばしばである。祐太の話題を出したC教諭（年中）は、園内研修があることによって、青陵幼稚  
 園の保育者は園児たちの「ほとんど全員を把握」できるようになり、「（保育者）全員の目で子どもたち  
 を見る」ことができていると語る。

## 7) 「どんなふうに弥生ちゃんがんばってたんだろうな？」

B教諭：ホウキをとられるまでのやりとり、どんなふうに弥生ちゃんがんばってたんだろうな？//

A教諭：ねえ、//青ばら（の子たち）に向かって、

A教諭：見たのが大泣きしてたところからなので、



- B教諭：でも、(弥生ちゃんと一緒だった)ほかの赤ばらさんはホウキ持ってたんでしょ？
- A教諭：持ってました。
- B教諭：てことは、やっぱり弥生ちゃんのを(青ばらの子が)とったんでしょね。
- A教諭：たぶん、弥生ちゃんがつよく出たので気に食わなかったんでしょね。
- 園長：たぶん、大きな声で「だめー！」って、／／C教諭：そうそうそう、／／
- B教諭：それでたぶん青ばらは怒るし、弥生ちゃんはこだわりがあるし、
- A教諭：たぶんそうですね。
- D教諭：弥生ちゃんは友だちの声で、／／A教諭：なごんだ、／／なごむというか、そこが意外だった。
- A教諭：案外、切り替えが早かった(笑)。／／D教諭：(笑)／／これでもう(弥生ちゃんは)聞かないだろうなと思ったんですけど。おもしろかったんでしょね。優希ちゃんが「アハハハハー！」って、ほんとに可らしい感じで笑ったから、それを見て弥生ちゃんも、「あ、おもしろい」と思ったのかな。
- 園長：隣にいた夏帆ちゃんが、「すべり台を(青ばらの子にも)貸してあげないといけないよ」とかそういうことじゃなくて、弥生ちゃんの気持ちをくんで「すべり台、もっといっぱいあったら弥生ちゃんも、(ホウキを)とられないでいたのにね」ってというような、そういう意味合いを感じるのね、この言葉にね。「もっとあればいいのにね。5個6個あれば、みんな使えるね」って。
- A教諭：そうですね。
- B教諭：よくブランコが取り合いになるじゃない。この(子どもの)人数に対して2つしかないの。「もっとたくさんあればいいのにね」って、(子どもたちに)よく言ってたなって、年少の時とか。そんなこと思い出しました。
- A教諭：私もそういうふうに言葉かけていたら、

「どんなふうに弥生ちゃんがんばってたんだろうな？」と問いを發したのは年長担任のB教諭である。この問いの意図をB教諭に確認すると、事例のエピソードは弥生が年長児に対して「思いをしっかりと出せていたからこそ」生まれたものであり、弥生の育ちを理解するには、彼女が泣き出すまでのやりとりを知りたかったからだという。それについてはA教諭も確認できていなかったため、やりとりは途切れてしまう。しかし、エピソードを読み進めると、「こだわりがつよい」とされてきた弥生にも「案外、切り替えが早」い一面があることが確認される。続くやりとりでは、弥生に「すべり台が2つあればいいのにね。5個6個あればみんな使えるね」と言葉をかけた夏帆が話題となる。夏帆の發話に弥生に対する気遣いが込められていると加藤園長が指摘し、A教諭が同意している。ここでの一連のやりとりも、子どもたちの心の育ちを読みとる保育者の幼児理解の場面といえる。また、「もっとたくさんあればいいのにねって、よく言ってたな」というB教諭の發話を受けて、A教諭が「私もそういうふうに言葉かけていたら」と發話しかける。この時にどのようなことを思っていたのか質問したところ、自分は「いままでBさんみたいに言葉かけてなかったなって、はっと思った」のだという。ブランコの取り合いが起きたとき、A教諭は「待っていれば替わってくれるよ、待ってようね、とか、そういう言葉で済ませて」いた。ところがB教諭の「もっとたくさんあればいいのにね」という言葉かけは、自分のものより「子どもが共感してくれる」響きをもっており、新鮮だったという。A教諭は「園内研で他の方が子どもにかけている言葉を聞くたびに、なるほどと思う」ことが多いと語る。

### 3. 考察 —エピソード記述を用いた園内研修の意義と課題—

ここまで、青陵幼稚園で実際に行われたエピソード記述を用いた園内研修の様子を紹介してきた。最後に青陵幼稚園における園内研修の意義と課題について考察を述べたい。

エピソード記述を用いた園内研修を推奨してきた鯨岡は、保育者主導の「力をつける」保育に傾斜した今日の保育一般の状況を批判し、「子どもの最善の利益」につながる保育を実現するには、「子ども一人ひとりの心を育てる保育」に舵を切りなおすことが必要だという。保育者自身によるエピソード記述には、子どもに寄り添う保育者だからこそ読みとれる子どもの心の動きが描き出されており、これを読み合わせることによって保育者の幼児理解や保育に対する省察が深まり、「子ども一人ひとりの心を育てる保育」に向かうことができると主張する（鯨岡；2015）。また、今回参照したエピソード記述を用いた園内研修の実践報告でも、この方法を用いることにより、エピソード記述者の保育者としての願いを全員で共有できる、子どもの成長を確認し合える、具体的な援助技術を学ぶことができる（今村；2010）；同僚の保育観や幼児理解に触れることで、保育に対しての省察が深まる、園の保育目標や方向性を同僚と確認し合える（岡花ほか；2010）；言葉かけなどの援助の意味が共有され、保育の考え方や見方が深まる（福崎ほか；2013）といった効果が得られることが報告されている。

あらためて青陵幼稚園の園内研修でのやりとりを追ってみると、事例のエピソードを検討する中で、保育者たちがおもに関心を寄せているのは、子どもたちがどのような思いを持っていたか、子どもの中でどのようなものが育ちつつあるのかといった、子どもの心の動き、内面の成長であることが確認できる。これについては、園内研修の報告者をつとめたA教諭が、研修後に行ったインタビューで次のように述べている。

以前（の勤務先は）はひたすら（子どもに活動を）やらせればいい、みたいな保育だったから、私もやらなきゃいけないことをやらすことで頭がいっぱいで、子ども中心に考えられなかったんですね。だけどここ（青陵幼稚園）に来て、園内研修受けて、あ、こういうふうにも子どもにかかわらないで見ていることで、子どもの深い心の中を読みとれるんだなっていうことに気づきましたね。一步退いて見ることで（子どもの）いろんな姿を見れるようになって、（保育って）おもしろい世界だなって思ってきたんです。

専門の研究者に指導を仰ぐことなく、現場の保育者によって工夫され、主体的に継続されてきた青陵幼稚園の園内研修であるが、そこから鯨岡がいう「子ども一人ひとりの心を育てる保育」を先取りしたような実践が生まれていることは興味深い。また、これまでに報告されているエピソード記述を用いた園内研修の効果は、青陵幼稚園の園内研修においても確認することができる。さらに注目したいのは、園内研修によって園児たちの「ほとんど全員を把握」できるようになり、「（保育者）全員の目で子どもたちを見る」ことができるというC教諭の語りである。C教諭の指摘は、学年やクラスの壁をこえてエピソード記述を検討し合うことで、園の保育者どうしの協働性が向上する効果が得られることを示唆するものである。

以上のような研修の意義が確認された一方で、青陵幼稚園の園内研修の課題も見えてきた。それは、研修が全般的に加藤園長の個人的な力量に依存していることである。園内研修のやりとりを追ってみると、加藤園長の発話のボリュームは他の保育者のものよりも格段に大きい。やりとりの中での確に意見や質問を述べ、研修の流れを作っているのも加藤園長である。園長自身もこのことに気づいており、「本

当は黙っていて、みんながしゃべり、(自分は)ぼろっと語る」のが望ましいが、「誰も話さない時間が続くと我慢できずにしゃべってしまうので、だめだなーと思っている」という。青陵幼稚園の保育者たちは、加藤園長を「母親のような存在」であると語っており、園長の存在が園全体の安定感を生み出し、出している。しかし、園内研修が園長のイニシアチブで終始してしまうのは生産的ではない。今後の園内研修では、「司会者が意見を促すだけではなくて、事例から検討すべき問題点を見つけて、それについて意見を求めるような進め方」を目指したいとのことであるが、見守っていききたい。

今回はエピソード記述を用いた園内研修を15年以上にわたり主体的に実践してきた青陵幼稚園の、実際の研修の様子を紹介した。研究者が介入して実施された研修とはことなる、ありのままの保育者どうしのやりとりが伝わったのではないだろうか。今回の報告では十分に検討できなかったが、青陵幼稚園の園内研修は、この園の保育者が培ってきた、保育者が「余計な手出し、口出し」をしない、子どもどうしの学び合いを大切にする保育とワンセットの関係にあると考えられる。その関係を読み解くことは、「保育者はどのように保育を創造するのか」という、私の本来の関心へと向かう作業でもある。今後の参与観察の課題として取り組みたい。

#### <本文注記>

- 1) 新潟青陵幼稚園HP [<http://www.n-seiryu.ac.jp/yochien/schedule.html>]を参照。
- 2) わずかな報告例として京都市山科区岩屋保育園での実践報告がある(鯨岡・鯨岡2007:第4章 エピソード記述を用いた保育ケース会議の展開)。

#### <参考文献>

- 1) 今村光章「保育援助技術の力量の向上を目指した現職教育のあり方を求めて:記述的エピソード法を用いた園内研修の試み」岐阜大学・教師教育研究, 6, 2010, 99-109ページ
- 2) 今村光章・東海第二幼稚園・中京幼稚園「いのちを学ぶ保育のありかたを求めて:記述的エピソード法を用いた園内研修の試み」岐阜大学・教師教育研究, 7, 2011, 55-64ページ
- 3) 今村光章・浅野教史・高橋聡「記述的エピソード法を用いた園内研究会のシステム構築を目指して:保育援助技術の向上のために」岐阜大学・教師教育研究, 9, 2013, 83-93ページ
- 4) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり・山元隆春「『エピソード記述』による保育実践の省察:保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンスの検討」広島大学 学部・附属学校共同研究紀要, 37, 2008, 229-237ページ
- 5) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・林よし恵・松本信吾・上松由美子・落合さゆり・武内裕明・山元隆春「『エピソード記述』を用いた保育カンファレンスに関する研究」広島大学 学部・附属学校共同研究紀, 38, 2009, 131-136 ページ
- 6) 岡花祈一郎「『エピソード記述』による幼児理解に関する研究:保育内容言葉との関連を中心に」広島大学 大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域, 59, 2010, 153-159ページ
- 7) 鯨岡峻「子どもの心の育ちをエピソードで描く:自己肯定感を育てる保育のために」ミネルヴァ書房, 2013
- 8) 鯨岡峻「保育の場で子どもの心をどのように育むのか:『接面』での心の動きをエピソードに綴る」ミネルヴァ書房, 2015
- 9) 鯨岡峻・鯨岡和子「保育のためのエピソード記述入門」ミネルヴァ書房, 2007

- 10) 福崎淳子・小河原恵津子・小野寺富美子「保育におけるエピソード記録から読みとる保育者の気づきと学び合い：人的環境に視点をあてた園内研修の試みから」東京未来大学研究紀, 5, 2012, 111-121ページ
- 11) 福崎淳子・佐々木恵美子・小野寺富美子「エピソード記録をもとにした保育者間の話し合いの意義：保育の質を高めるために」東京未来大学研究紀要, 6, 2013, 141-151ページ
- 12) 福崎淳子・佐々木恵美子・清水やす子「保育のエピソード記録から読みとる子どもの心の世界：保育者間の話し合いを土台に」東京未来大学研究紀要, 7, 2014, 251-261ページ